

創立60周年
since 1962

東京バッハ合唱団 月報

[第 718 号] 2022 年 4 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.718

April 2022

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

創立 60 周年記念企画 “この 60 年を振りかえる” 第 4 回

30 周年まで…ヨーロッパ演奏旅行など

大村 恵美子 (主宰者) / [編集部補注]

外へも内へも、創立以来もっとも発展・展開した時期 (70 年代から 90 年代) を扱います。

ここでは、個々の催しに説明を加えるほどのスペースもないほど、あらゆる場所で、日本国内の教会その他のお祝いコンサートや、ヨーロッパ (特にドイツ) からの友好訪問を迎え、またこちらからも出向いて、各種の親睦演奏会で、私たちの演奏を披露し、多くの功績を残した、充実した時期だったことがわかります。名辞ばかりを羅列した記録となってしまいますが、どうぞおゆるしてください。

定期演奏会では、これまでどおり、カンタータとモテットを中心とした既演曲に、新たに取り上げる作品 1、2 曲を加えて、どの定演にも、大歓迎をいただいで来ました。

また、創立 20 周年、30 周年などの節目も意識して、バッハの代表的大作を着々と披露しています。マニフィカト (1972)、ヨハネ受難曲 (1973)、復活祭オラトリオ (1977)、マタイ受難曲 (1982)、ミサ曲口短調 (1987) ……。

これら大曲だけに追いまわされるばかりでなく、小林道夫さんの後の指揮者の役割を私自身が引き継がざるを得なくなって (前回補注*5 参照)、心機一転、最初に手掛けたのは、「初期作品連続演奏」(1979-81)、「ヴァイマル・ケーテン時代のカンタータ」(1984-86) の両チクルスを企画して、いわゆる初期カンタータを網羅することでした。どの 1 曲さえも、驚くほど凡作がなく、このように秩序よく学び進めることによって、バッハとの理想的な接点が出来て、よかったと思っています。

1972 年

・10 月 21 日 (土)、第 26 回定期演奏会 (創立 10 周年記念公演) BWV29、BWV8、BWV79、杉並公会堂、指揮小林道夫、S 市田キヨ子/A 戸嶋由美/T 板橋勝/B 原田茂生。

1973 年

・10 月、移動式小型パイプオルガンを団で購入 (カンタータ演奏に必須のコンティヌオ・オルガン、独 Otto 社製)。



■雪割草 (写真: 千葉光雄・団員)

1974 年

・10 月 8 日 (火)、横浜指路教会創立 100 周年記念演奏会 (BWV21、BWV80)、神奈川県立音楽堂、指揮小林道夫、S 市田キヨ子/A 戸田敏子/T 河瀬柳史/B 渡辺明、東京ゾリステン、Org 草間美也子。

1975 年

・12 月 15 日 (月)、第 35 回定期演奏会《クリスマス・オラトリオ》I-III 部、指揮小林道夫、九段会館ホール。

1976 年

・9 月 18 日 (土)、第 37 回定期演奏会 (BWV38、56、140)、指揮堤俊作、東京シティフィル、世田谷区民会館。

1977 年

・7 月 2 日 (土)、創立 15 周年祝賀会、辻莊一氏講演「バッハ音楽の精神的背景」、神田 YMCA ホテル。

1978 年

・7 月 30 日 (日)、シュトゥットガルト・バッハ合唱団指揮者ヘルムート・リリング氏、カフェハウス・バッハ(*1) を訪問。

1979 年

・10 月 13 日 (土)、第 45 回定期演奏会「初期作品連続演奏 I」(BWV150、BWV182、BWV196)、指揮大村恵美子(*2)、東京カンタータ室内合奏団、石橋メモ

リアルホール。

1980 年

・10 月 10 日 (金) ~ 12 日 (日)、長崎訪問演奏 (BWV4、モテット BWV230、ト長調ミサ BWV236)、レデンプトリスチン修道院・長崎銀座町教会・長崎バプテスト教会 (礼拝)、指揮大村恵美子、Org 草間美也子、Pf 岸谷久仁枝。

1981 年

・6 月 22 日 (月)、連続レクチャーコンサート『Bach 偉大にして永遠の挑戦』開催 (*3)、池袋西武「スタジオ 200」。

1982 年

・4 月 17 日 (土)、第 51 回定期演奏会 (創立 20 周年記念公

月報 2022 年 4 月号 CONTENTS

- ・カンタータの場景⑩—日本語版の完結計画 (2) …p. 3
- ・“仰げば尊し”の季節 (大村恵美子) …p. 3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [14] (大野博人) …p. 4

演)《マタイ受難曲》(日本語上演初演)、指揮大村恵美子、新宿文化センター。

・7月3日(土)、記念祝賀会、遠山一行氏講演「バッハと私」、本郷学士会館。

1983年

・8月6日(土)～22日(月)、第1回ヨーロッパ演奏旅行(*4)、ライプツィヒ聖トーマス教会を始め7都市で公演(BWV4 日本語、BWV80、モテット BWV225、227、228)、指揮大村恵美子、Org 草間美也子、Pf 森永純子。

1984年

・9月14日(金)、グンドルフ・アンメ牧師(*5)来日記念演奏会「バッハ音楽の夕べ」(BWV4、モテット BWV225、228)、指揮大村恵美子、信濃町教会。

1985年

・6月30日(日)、創立記念日祝賀会、東独イエーガー大使夫妻、礪山雅氏ほか多数出席、新宿三井ビル「メヌエット」。

・11月28日(木)、来日中の聖トーマス教会合唱団との交歓会、白金・都ホテル。

1986年

・5月10日(土)、第60回定期演奏会「口短調ミサ曲の源泉」(BWV12、29、46、215)、指揮大村恵美子、S 名古屋木実/A 田中奈美子/T 佐々木正利/B 渡辺明、東京カンタータ室内合奏団、石橋メモリアルホール。

1987年

・12月12日(土)、第63回定期演奏会(創立25周年記念公演)《口短調ミサ曲》(*6)、指揮大村恵美子、東京カンタータ室内合奏団、Org 草間美也子、銀座中央会館。

1988年

・8月12日(金)～22日(月)、第2回ヨーロッパ演奏旅行(BWV6 日本語、131/5 など、モテット BWV226、227、230)。

1989年

・8月11日(金)、第20回野尻湖特別演奏会(BWV75、167、78、76より)、NLA 神山教会、指揮大村恵美子、VC ゲルハルト・ワルブレヒト(新日フィル)、Pf 関紅子。

1990年

・4月1日(月)、東ドイツ信徒代表団来日記念演奏会(BWV6、78、モテット BWV230、口短調ミサ曲より抜粋)、指揮大村恵美子、Org 長谷川美保、東京山手教会。

1991年

・5月25日(土)、第69回定期演奏会「40歳のバッハ」(BWV1、2、4、68、137)、指揮大村恵美子、S 名古屋木実/A 田中奈美子/T 佐々木正利/B 宇佐美桂一、石橋メモリアルホール。

1992年

・4月18日(土)、第71回定期演奏会(創立30周年記念公演Ⅰ)《ヨハネ受難曲》、指揮大村恵美子、S 曾我栄子/佐々木まり子/T 佐々木正利/B 宇佐美桂一/渡辺明、Org 草間美也子、新宿文化センター。

・12月18日(土)、第72回定期演奏会(創立30周年記念公演Ⅱ)《口短調ミサ曲》、指揮大村恵美子、S I 日比吉子/S II 佐々木まり子/T 佐々木正利/B 宇佐美桂一、Org 草間美也子、都市センターホール。 【つづく】

◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm

創立60周年記念公演、開催のご案内

第121回定期演奏会

【日時】2022年5月14日(土)、14:00 開演

【会場】杉並公会堂大ホール

(JR中央線/総武線/東京メトロ丸ノ内線「荻窪駅」北口7分)

*

カンタータ第21番《われは憂いに沈みぬ》

カンタータ第1番《あしたに輝く たえなる星よ》

カンタータ第147番《心と日々のわざもて》

*

ソプラノ：光野孝子、アルト：谷地畝晶子

テノール：鏡貴之、バス：山本悠尋

管弦楽：コレギウム・アルモニア・スペリオール・ジャパン (ARS)

オルガン：室田千晶、合唱：東京バッハ合唱団

指揮：大村恵美子

■チケット(全席指定席)

A席：4000円(当日4500円)、B席：3000円(当日3500円)

■お申し込み/お問い合わせ

メール office@bachchor-tokyo.jp 電話 03-3290-5731

東京バッハ合唱団事務局 <http://bachchor-tokyo.jp/>

(感染対策にご協力いただけます。詳細は公演チラシをご参照ください)

*

読者のみなさま、どうぞお仲間お問い合わせでご来場いただき、この60周年を、ともに寿いでいただければ幸いです。

後援会員・団友のみなさまへ

後援会員・団友のみなさまには、先月号月報に同封して「招待状」をお送りしました。お手許に届いていない方がいらっしゃいましたら、恐縮ですが、ご一報ねがいます。

【補注】

*1)「カフェハウス・バッハ」は、1975年、小田急線経堂駅近くに開店、団の事務局を兼ねた。6年後の84年にはリリング氏率いるゲヒンガー・カントライのメンバー10名も来店して団員と交歓。89年に役目を終えて閉店。

*2)これが、主宰者大村恵美子の常任指揮者を兼ねた最初の定期演奏会、以後今日に及ぶ。

*3)当合唱団と西武百貨店スタジオ200との共同制作による連続企画(戸口幸策監修)、翌82年2月まで計8回開催。①シンポジウム(戸口幸策/辻莊一/高橋悠治/佐治晴夫)、②講演(服部幸三)、③講演(礪山雅)、④講演(前川誠郎)、⑤講演(杉山好)、⑥シンポジウム(角倉一郎/村上陽一郎/大村恵美子)、⑦講演(礪山雅)、⑧シンポジウム(高橋昭/大橋敏成/戸口幸策/大村恵美子)。

*4)旅程前半・東独側は、ドイツ民主共和国芸術団の招聘による(ハレ/マグデブルク/ライプツィヒ/ベルリン、8/9～13)。後半、西独シュトゥットガルト/仏ストラスブール/テゼ(8/15～18)。第2回演奏旅行は1988年、以降第3回93年、第4回97年、第5回2009年とつづいた。

*5)ドイツ・東アジア伝道会の代表者グンドルフ・アンメ牧師は、当合唱団を東ドイツの招聘事業につなげる上で多大な貢献を果たしてくださった。アンメ師との仲介役は、団友の松山與志雄牧師(現日本エキュメニカル協会会長)。5年後の第2回旅行は、アンメ師を中心とした東ドイツの教会が招聘の主体となった(88年、壁崩壊の前年!)

*6)この時の上演はラテン語原詞による。その後も何度か(92年など)ラテン語上演を重ね、大村恵美子日本語訳詞による《口短調ミサ曲》初演は、2011年12月の第106回定期演奏会(創立50周年記念公演)を待たねばならない。

“仰げば尊し”の季節

大村 恵美子

学校を卒業する日を控えて、この、教師に感謝する歌が思い浮かんで来ます。あまり深く感じないで、式でこれを歌って学び舎を去って行った人々も多いでしょうが、私は、さいわいにも、1年生として学校に初めて行くことになった日から、先生方にはまことに恵まれて過ごしてきました。

小学校からして、背が高く、どこから見てもハンサムな、若い男性の先生の担任クラスに入り、毎朝、学校に行くのが待ち遠しく、早くから起床していました。その先生は、ただ美しいだけでなく、授業時間の合間に、色々な良い本を読み聞かせてくださり、一時でも長くクラスの子供たちと共に居て、有名なお話の本を、私たちに紹介して下さるのでした。

私たちも、校庭で先生が登校して来られるのを待ちかまえて、「あ、先生だ！」と、全速力で迎えに走っていたものです。そんなに好きでたまらない先生も一緒に、4、5、6年と3年間にわたって持ち上がりになったので、高学年になるに従って、読んでくださるものも芭蕉や一茶の俳句、万葉の和歌などの古典も多くなり、先生の声で初めて聞いた私の一生の宝として、心に永住させてくださったのです。

私は早々と結婚したけれど、子供に恵まれず、子育てのすばらしさは経験しないで来ましたが、私の学童時代のように、先生や周りの大人の方々から多くのものを受けついで来られたのは、そう多くはない、と一人で信じこんでいます。

いまの大人の人たちは、口癖のように「あれこれ忙しくて」とくり返していますが、どんなに忙しくても、幼い子供たちをいつでも意識して、何かを教えこんでやる、という積極的な意欲よりも、私は、自然な形で人間一般にもてはやされるような文化遺産に、子供たちの目を向けさせられたなら、と感じています。

そのようにして、理解ある大人たちの愛情で育った若者は、またきっと生き易い、暖い、たのしい世界をつくりあげてゆくことでしょう。私は、それを強く期待しながら、毎日を生きています。

■さきたま古墳の桜、菜の花を従えて（写真：千葉光雄）



【既刊楽譜】作曲アイディアの素材から見渡してみる

バッハ・カンタータの場景 №10

大村 健二（団員）

ブライトコプフ日本語版の完結計画（2）

先月の当欄では、唐突に12曲のカンタータ作品名を並べました（バックナンバーへの移動は、前ページ脚部参照）。年内に一括して出版する予定の曲名です。

この欄では、われわれが刊行を続けているブライトコプフ版底本による日本語訳詞付き楽譜の既刊分79曲（他に2曲の世俗カンタータも既刊）を、随時紹介していますが、バッハの約200曲とされた教会カンタータは、偽作や伝承不完全、分類枠の変更などにより、今日192曲ほど（数え方によります）が上演可能な真作とされています。既刊分を除いた残りの113曲（192-79）を、年に12曲ずつ10年をかけて完結させようという計画を、この60周年の記念企画として立ち上げました。底本版元も乗り気です（1月号月報No.715参照）。

その計画第1年次の作品リストが上述のもの。残り全曲の上演用訳詞稿（譜面の全声部に歌詞の書き込みを終えたもの）も、すでに仕上がって上梓の順番を待っています。選曲はアトランダムですが、原則としてBWV番号の若い順にこなしていくことにしました。事情によっては、未刊リストの中から優先して取りあげる作品も出てくるでしょう。そこは臨機応変に進めていく予定です。

出版資金は、ここ数年で脚光を浴びているクラウドファンディング（CF）の手法を活用します。1年単位で出資者を募り、寄付額に応じて、その年発行の楽譜の全12冊セットだったり、希望の1冊だったりを返礼品として贈呈します。全額寄付（見返り不要）も選択肢にありとするつもりです。目下、寄付額の設定等の詳細を詰めています。目標額に達すれば、そこからCF企業が報酬を受け取り、未達であればCF企業の側で出資者に全額を返金する、これが仕組みです。

わが国の音楽文化史上に誇るべき偉業ですよ、大村恵美子個人完訳の日本語版バッハ・カンタータ楽譜全集を完結させてください、と宣伝しますが、これにはありがたい“副反応”が予想されます。

この60年間、バッハ合唱団の広報活動は、チラシを撒いたり、新聞雑誌に投稿したり、といった古典的な手法を出ることがありませんでした。せいぜいがHPやFBへの公開にとどまります。これらは意識的な選択のアンテナにしか届かないものです。ところが、CFの仕組みを用いることにより、バッハ音楽のディープな愛好家やキリスト教に深い理解をもつ層を越えて、かなり広範な興味を持ち主たちとのインターフェースが期待できるのではないのでしょうか。新たなコンサートへの来場者、新たな合唱活動への参加者……壁を超えて、その先の視線たちへ。

【つづく】

◆上演用歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

戦争と音楽

安曇野閑人 大野 博人

世界的なチェリスト、ヨーヨー・マ氏が道ばたで立ったまま演奏している。そんな映像がネットに流れた。普段着姿。マスクをしている。

ワシントンのロシア大使館の門の前らしい。足下の路面にはチョークで書かれた「ウクライナから去れ」という文字。映像は短く、街頭の雑音がかぶっているけれど、バッハの無伴奏組曲の調べが聴き取れる。

米国からの報道によると、突然のパフォーマンスに彼だと気づく人は多くなかったそうだ。通りがかった人に「だれもが何かをしなれば」と話していたという。

ロシアのプーチン大統領によるウクライナ侵略戦争に、いてもたってもいられない思いを抱いた音楽家は彼だけではない。各地で、著名な演奏家がウクライナ支援の声を上げている。

他方、ロシア出身の音楽家は苦境に追い込まれた。

プーチン大統領と親しいといわれる指揮者ヴァレリー・ゲルギエフ氏は侵略への批判を明確にしなかったため世界各地で舞台に立てなくなった。

2008年10月、私はロンドンでゲルギエフ氏にインタビューをした。すでに世界的なスター。エネルギッシュな活躍ぶりから想像していたのとはちがひ、穏やかでいねいに答える話しぶりが印象に残る。首席指揮者を務めていたロンドン交響楽団との訪日直前で、もっぱら日本で取り上げるプロコフィエフの交響曲について語った。

プロコフィエフはロシア革命の混乱を避けていったんは外国に逃れた作曲家だ。

「彼は国外に出たことはあっても、常にロシア文化とともにいました」

ソ連の建国後、モスクワに帰ったプロコフィエフは深く苦しんだろうという。

「彼が愛したロシアを見つけることができなかつたからです。でも、彼は思ったのです。クレムリンにいるのがレーニンだろうとスターリンだろうと重要ではない。自分にとってだいじなのは作曲だ、と」



■ピアノを弾きながらインタビューに答えてくれたゲルギエフ氏（筆者撮影）

プロコフィエフの葛藤に、ゲルギエフ氏は自身の迷いや苦しみを重ねていたのかもしれない。当時、ロシアと旧ソ連のグルジア（現ジョージア）との間で南オセチアをめぐる紛争が起きた。南オセチアにルーツがある彼は、ロシアの祝勝コンサートのタクトをとった。それが西側で批判を浴びた。しかし、彼にとってロシアは「解放者」だった。

「あれは人間としての行動でした。私は政治家ではないのです」

そして、こうも話した。

「軍隊と軍隊が闘うのは戦争ですが、戦車で子供を攻撃したら、それは戦争ではない。殺人です」

「軍隊が民間人を殺そうとするなら、政治指導者は、やめろということができるはずですよ。しかし、その指導者が、人々が眠りについている街を攻撃しろ、というなら、それは犯罪です。私は、攻撃される人々の側に立ってみたい。黙っていることなどできません」

表舞台から去った今、彼は沈黙し続けるのだろうか。

戦争をしている国で、オーケストラのコンサートを聴いたことがある。

1999年、旧ユーゴのコソボ紛争で北大西洋条約機構（NATO）が空爆を開始した。その標的であるセルビアのベオグラードに入った。ほぼ毎晩、ミサイルや爆撃機が飛来し、落雷のような轟音とともにミサイルや対空砲火が夜空を焦がす。軍事施設などへのピンポイント爆撃だということにはなっていた。

ある夜中、滞在するホテルが、ひととき巨大な音響とともに地震のように揺れた。あわてて、窓の外を見ると、向かいの与党ビルが炎をあげて燃えていた。ぞっとした。

そんな街で、ベオグラードのオーケストラが市民を励ます演奏会を開いた。いつ空襲警報が鳴るかもしれない。ほぼ満席のホールの空気は張りつめていた。

ただ、セルビアはユーゴ連邦から独立を目指すコソボ自治州を武力弾圧して国際社会から批判を受けていた。政権が独裁的なのも事実だった。空爆の被害者だが、コソボに対しては加害者でもあった。

空爆で破壊された政府庁舎を取材していたら、通りがかった初老の男性が近くの血だまりを指さしながら憤りをあらわにした。「私は自分の国の大統領が嫌いだ。しかし、こんなことをされたら、彼を支持したくもなる」。

戦争が始まると、社会は硬直化する。人々の心はかたくなになる。

空爆の街でモーツァルトやチャイコフスキーを演奏した音楽家たちはどんな思いを込めようとしたのだろうか。聴いた人々の心に灯ったのは、平和への願いだったのか、それとも「敵」と闘う連帯感だったのか。今もよくわからない。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）